

鹿児島大学・共通教育科目における 稲盛アカデミー提供科目を通じた稲盛環境思想の実践と課題（2）

萩原 豪（鹿児島大学稲盛アカデミー 特任講師）

Practice and Issues of Inamori Environmental Thoughts through General Education Courses held by Inamori Academy, Kagoshima University (2)

HAGIWARA, Go Wayne

(Senior Assistant Professor, Kagoshima University Inamori Academy)

キーワード：共通教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、利他、足を知る、共生

Abstract:

Inamori Academy provides general education courses at Kagoshima University. There are 5 courses for environmental issues which are provided by the Inamori Academy. The core idea of these 5 courses is based on altruism, symbiosis and "Enough is as good as a feast" which is known as the Inamori's Environmental Thought. By taking one of these five courses and participating in discussions with group members, students learn Inamori's Environmental Thought and what they should understand and act upon for the sustainable society in near future.

Keywords: general education, ESD (Education for Sustainable Development), altruism, "Enough is as good as a feast", symbiosis

1. はじめに

鹿児島大学稲盛アカデミーでは、稲盛和夫氏の「豊かな人間力をもった次世代を担う若者」を育てたいという思いを、全学的な共通教育の教育・学習目標に整合させて開講している。筆者は、担当しているすべての教科において、稲盛氏の環境思想の中でも「足を知る」「利他」「共生」という3つのキーワードに着目し、これらを講義の基軸としている。受講生に単なる「知識」ではなく、いかにして「考え」、「実践」していくことができるかを考えてもらう講義運営を行うことを試みている。

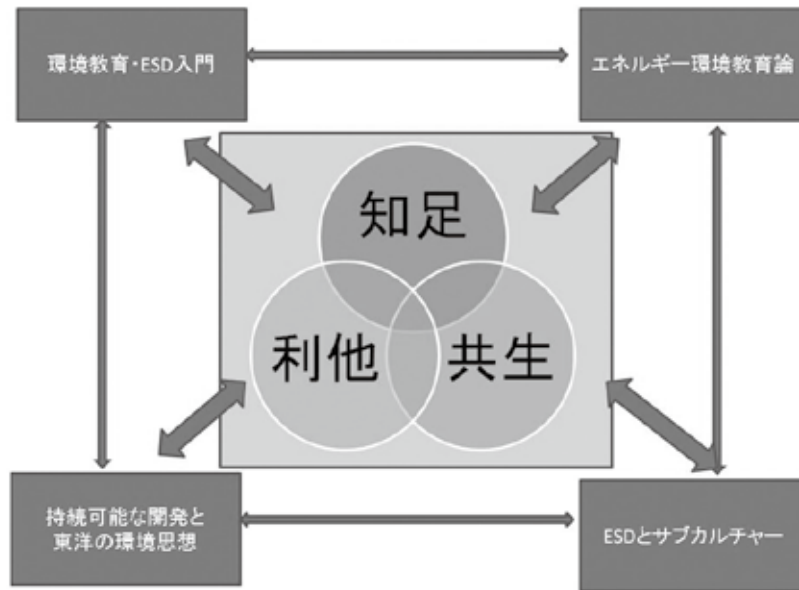


図1 稲盛環境思想と各科目の相関図（筆者作成）

2011年度の稲盛アカデミー研究紀要において、2009年度から現在まで担当している科目のうち、「エネルギー環境教育論」¹、「持続可能な開発と東洋の環境思想」²、「ESDとサブカルチャー」³の3科目を取り上げ、共通教育の中での授業実践の振り返りを行い、課題検討を行った（萩原2012）。本稿においては2009年度から現在まで、少人数の演習形式で行っている「環境教育・ESD論」について、特に受講生有志が自主的に始めた「くじらプロジェクト」を中心とした振り返りと検討を行う。

2. 授業概要

筆者は担当する教科の中で、少人数の受講生を対象とした「環境教育・ESD入門」を担当している。この教科は座学だけではなく、ワークショップを用いて、環境教育・ESDについて教室の中で学ぶだけではなく、教室の外で実際に見聞き、行動することを目的とし

1 2009年は前期に「エネルギー環境教育論」という名前で開講していたが、2010年度および2011年度は前後期開講となったため、「エネルギー環境教育論A」および「エネルギー環境教育論B」という名称で開講した。また2012年度は前期を「エネルギー環境教育論（入門）」、後期を「エネルギー環境教育論（基礎）」という名称に変更している。本稿では便宜上、すべて「エネルギー環境教育論」として表記を統一している。

2 2009年度から2011年度まで、後期に「持続可能な開発と東洋の環境思想」という名前で開講していた。2012年度から前後期で開講することにしたため、前期を「持続可能な開発と東洋思想（入門）」、後期を「持続可能な開発と東洋思想（基礎）」という名称に変更している。本稿では便宜上、すべて「持続可能な開発と東洋思想」として表記を統一している。

3 2010年度前期に「ESDとサブカルチャー」として開講した。2010年度は稲盛アカデミー協力教員である野村卓・本学産学官連携推進機構特任准教授（かごしまルネッサンスアカデミー健康環境文化コース主任研究員）を共同担当教員として開講していた。学生からの要望も多かったため2012年度からは前後期開講とし、前期を「ESDとサブカルチャー（入門）」、後期を「ESDとサブカルチャー（基礎）」として開講している。本稿では便宜上、すべて「ESDとサブカルチャー」として表記を統一している。

たものである。

筆者が担当する講義では、授業（90分）の前半は基本的に座学の講義形式をし、後半に行くに従ってワークショップ形式（グループワーク）の講義形式を採っている。授業の進行に伴い、ワークショップ形式の講義形式の比率を高めていき、ワークショップ形式の授業に移行している。授業におけるワークショップを通じて各グループでまとめた内容は、授業内でのグループ発表を最終報告としていたが、2年目（2010年度）より、かごしま環境未来館で授業合同の最終報告会を行い、この場でグループワークの最終報告を行っている。これは情報発信能力（プレゼンテーション能力）を高めるだけではなく、稲盛氏の環境思想のうち「足を知る」「利他」「共生」に関わる事項について、受講生なりに考察していった結果を広く社会に発信していくことを試みているものである。

2009年度は火曜日4時限目に開講し、前期を「環境教育・ESD入門（Ⅰ）」、後期を「環境教育・ESD入門（Ⅱ）」として講義を行った。受講生の要望もあり、2010年度より火曜5時限目に「環境教育・ESD入門（Ⅲ）」と「環境教育・ESD入門（Ⅳ）」をそれぞれ前後期に追加提供することにした。4時限目も5時限目も、いずれも大学1年生の初学者を対象としているが、特に5時限目については、初めて受講する学生に加えて、既に筆者の担当科目を受講して単位認定を受けている学生を受け入れるようにした。

また2012年度より科目名を「環境教育・ESD論」に変更し、前期開講している（Ⅰ）を「入門」、（Ⅲ）を「応用」に、後期開講の（Ⅱ）を「基礎」、（Ⅳ）を「実践」として、それぞれ開講している。

以下、本稿では2009年度開講の「環境教育・ESD入門（Ⅰ）（Ⅱ）」と2010年度以降開講の「環境教育・ESD入門（Ⅰ）（Ⅱ）」および「環境教育・ESD論（入門）（基礎）」を「4時限目」、2010年度以降開講の「環境教育・ESD入門（Ⅲ）（Ⅳ）」および「環境教育・ESD論（応用）（実践）」を「5時限目」として表記をしていく。

3. 講義内容

4時限目の講義では「NESCU-SHORT」と銘打ったグループワークを行っている。これは図2に示すキーワードの頭文字をとったもので、前期に「自然（Nature）」、「エネルギー（Energy）」、「地域社会（Community）」、「社会（Society）」、「大学（University）」を、後期に「焼酎（SHochu）」、「温泉（Onsen）」、「ラーメン（Ramen）」、「トイレ（Toilet）」に関するグループワークを行うものである。年度によっては受講生の人数などの関係から、設定することができないグループもあった。



図2 4時限目のグループワーク概念図（筆者作成）

2009年度の4時限目では受講生は必ずどこかのグループに所属し、そのキーワードに関わる環境問題について考え、どのようにすれば第三者（この場合は鹿児島大学の学生、特に大学1年生を想定）に対してそのことに気づいてもらえるのか、ということをグループ内で検討することを課題とした。そして、グループにおける検討結果を基にして、第三者に働きかけるためのプロジェクト案を企画し、それを講義最終回において最終発表してもらった。

例えば、後期に行った「温泉」のグループは、鹿児島市内の銭湯が温泉であることに着目し、自宅で入浴することと銭湯で入浴することでのCO₂排出量をはじめとする環境負荷について調べていた。そして、学生がこの環境負荷に気づくためにはどのようにすればよいのか、そして環境負荷を少しでも減らすために自宅での入浴ではなく、近場の銭湯へ行くという行動をとるためにはどのようにすればよいのか、ということのプロジェクトを提案するに至った。このプロジェクトを検討するにあたり、温泉グループの学生たちは実際に銭湯へ行き、銭湯の概要や、銭湯が抱える問題点などについて、銭湯の事業者に直接聞き取り調査を行っている。

ここで提案されたプロジェクトは説得力があったものの、それを実際に行動に移すことができなかった。2009年度の講義ではプロジェクトを提案することが最終目的であり、実際に行動することは講義内容に含まれていなかった。また最終報告会の後、実際に行動するにしても、最終報告会自体が授業最終日に行っていたこと、その後の日程は期末考査があったため、実際に行動をすることはできなかったと考えられる。



図3 2009年度後期4時限目・最終報告会の様子（2010年1月26日、筆者撮影）

2009年度の反省を踏まえ、2010年度の4時限目では「NESCU-SHORT」のプロジェクトの最終目標を、最終報告会の前に定めた一定期間（7日から10日間）、グループごとに企画内容を実施する、というように変更した。これにより各グループから提案されるプロジェクトが実際に有効に機能するのか、またプロジェクト自体が机上の空論あるいは理想論だけで終わるのではなく、自分たちが実際に行うことができるのか、という実現可能性という側面を持たせることにした。この際、プロジェクトの実施期間については、受講生の作業スケジュールや進捗状況などを勘案し、その都度調整を行っており、プロジェクトが与える効果については別として、プロジェクト自体の実現可能性を重視するようにした。

その実践例として、2011年度後期の4時限目で行った「NESCU-SHORT」プロジェクトのうち、「トイレ」に関わるグループの活動を見ていきたい。このグループでは、トイレに関わる環境問題として、トイレに設置されているハンドドライヤーに着目したプロジェクトを検討していった。折しも2011年3月11日に発生した東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により、全国的に節電を推し進める社会的風潮があったことが、このプロジェクト提案の問題意識にも挙げられていた。本学稲盛アカデミー棟のトイレにはハンドドライヤーが設置されており、トイレグループではこれを身近な問題として捉えることにした。

トイレグループでは、まず稲盛アカデミー棟に設置されているハンドドライヤーのメーカーに消費電力を確認するところから活動を開始した。そして、ハンドドライヤー使用時の消費電力が1分間あたり12Wであることを明らかにした。学内でトイレに2回行き、そ

ここでハンドドライヤーを1分間使用したと仮定して、それを1ヶ月(30日)使う学生100人いたと仮定して、各トイレのハンドドライヤーの1ヶ月あたりの消費電力を72,000Wと単純計算をした。この72,000Wがエアコン(暖房)を100時間使用した時とほぼ同じ消費電力量であることを見つけ、これを比較対象としてトイレ利用者(学生)に訴えることを検討していった。

このグループではトイレ利用者に、ハンドドライヤーを使うという利便性に伴う環境負荷、そして電力消費について気づいてもらうことを目的としたポスターを作成した。そして、気づきに伴う行動の提案として、巷で使われている「女子力」と「男子力」という言葉をキーワードに、「女子力・男子力をさりげなくアップさせるために、ハンカチを持ち歩いて使おう」ということをポスターに記載した。

4時限目のプロジェクト実施期間は2012年1月16日(月)から20日(金)の一週間を設定しており、このポスターは稲盛アカデミー棟のトイレの個室の壁およびハンドドライヤーの上部に貼り出された。また、男子トイレは小便器の前の壁にも貼り出した(図4)。

4. 学外における研修活動

本講義では環境問題を扱う上での体験学習を重視している。教室で行うワークショップ形式の講義や、プロジェクトの実施なども体験学習のひとつとして位置づけている。しかし、環境問題とは教室の中で取り扱うだけではなく、実際に現場で見聞きしたりすることによって得る知見も大きい。受講生の視野を広げるため、4時限目および5時限目の講義では、週末の時間を利用して正課の授業を行っている。その一環として、4時限目および5時限目の受講生合同で、毎年1月にいちき串木野市および薩摩川内市において研修合宿を行っている。この合宿の目的は、その時点で各グループが進めているプロジェクトについて精査する時間を取ると共に、鹿児島県における環境問題の現状を自らの眼で確かめる、ということに重点を置いている。

2009年度は濱田酒造の協力を仰ぎ、鹿児島の特産品である芋焼酎の工場見学を行った。濱田酒造が所有する3つの工場(傳藏院蔵・薩摩金山蔵・傳兵衛蔵)の見学を通じ、受講生は芋焼酎の製造過程を知るだけでなく、鹿児島が育んできた芋焼酎の歴史についても学んできた。特に傳藏院蔵の見学時には、工場に隣接する西薩クリーンサンセット事業協同組合にある焼酎粕を利用したリサイクル施設を見学し、芋焼酎製造時の環境負荷を抑える方策について現場で学ぶことができた。2010年度以降の合宿では、スケジュールの関係から傳兵衛蔵の見学のみ行っている。

また合宿では同時に日本地下石油備蓄が管理運営している串木野国家石油備蓄基地ちかび展示館と、九州電力川内原子力発電所の見学を行っている。筆者の専門領域であるエネルギー問題について、環境問題というものがより身近なものであり、日常的に利用しているエネルギーがどのようにして日本に来ていて、どのように使われているのか、というものを実際に知る機会を提供している。

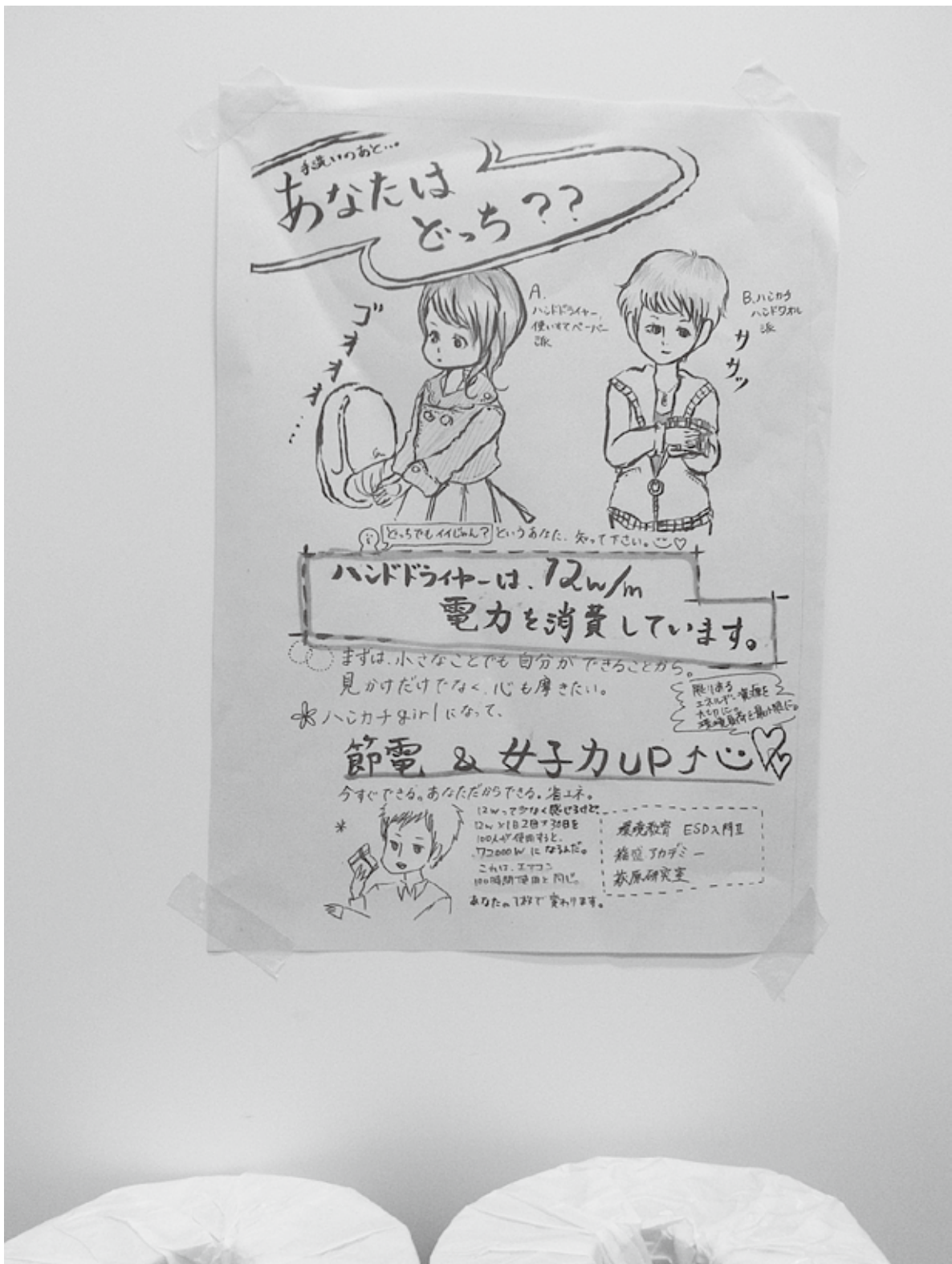


図4 2011年度後期4時限目のトイレグループによるプロジェクト実施
稲盛アカデミー棟トイレに掲示されたポスター（2012年1月19日、筆者撮影）

5. 稲盛環境思想の昇華：くじらプロジェクト

2009年度前期4時限目の講義において、捕鯨問題を題材として扱った。捕鯨問題は非常にセンシティブな問題であるが、稲盛環境思想における「共生」というテーマ、そして鹿児島における鯨肉の食文化、という点から、この問題を講義内で取り上げるに至った。

この時、講義の中で受講生たちが「捕鯨問題への賛否を議論する前に、自分たちの世代は鯨の肉を食べたことがない人が多い。日本に捕鯨文化や鯨肉の食文化があり、捕鯨をすることを是としたとしても、その肉がおいしくなければ食べる人はいないだろう。そして、食べる人がいなければ、この議論は成り立たないのではないか。」という議論を展開していった。そこで議論をしていた受講生有志が大学生協の中央食堂へ赴き、「学食で鯨肉を出すことはできないか」ということを尋ねにいったところ、生協担当者から中央食堂において期間および数量限定で鯨肉メニューを提供することの回答をいただいた。ここに学生による「くじらプロジェクト」が始まった。

この「くじらプロジェクト」は鹿児島大学生協生活協同組合中央食堂が主催者となり、4時限目の受講者有志6名が企画と運営を担当した。2009年10月19日(月)から21日(水)の3日間、中央食堂において鯨肉メニュー（カツと竜田揚げの2種類）が1日60食限定で提供された（図5および図6）。



図5（上） 食堂内に掲示されたメニュー



図6（下） 「くじらプロジェクト」で提供された鯨肉メニュー

(2009年10月19日、筆者撮影)

この「くじらプロジェクト」は、サブタイトルを「食べる、知る、そして考える」と銘打ち、捕鯨問題について調べたことを模造紙にまとめて中央食堂内に掲示をし、学生に広く伝えることを行った（図7）。また鯨肉メニューを注文した人にアンケート調査を行い、それとまとめていった。鯨肉メニューは11時から提供されたが、12時を過ぎる頃には売り切れてしまい、準備された180食は完売し、「くじらプロジェクト」はおおむね好評であった。この取り組みは南日本新聞からも取材を受け、2009年10月20日の朝刊に記事が掲載されている（図8）。

しかし、学内各所に貼り出した「くじらプロジェクト」のポスターの下に、「Please Don't Eat Me」という鯨のポスターが匿名で貼り出されるなど、一部の人は反対の意



図7 中央食堂内に掲示されたポスター
 (2009年10月19日、筆者撮影)

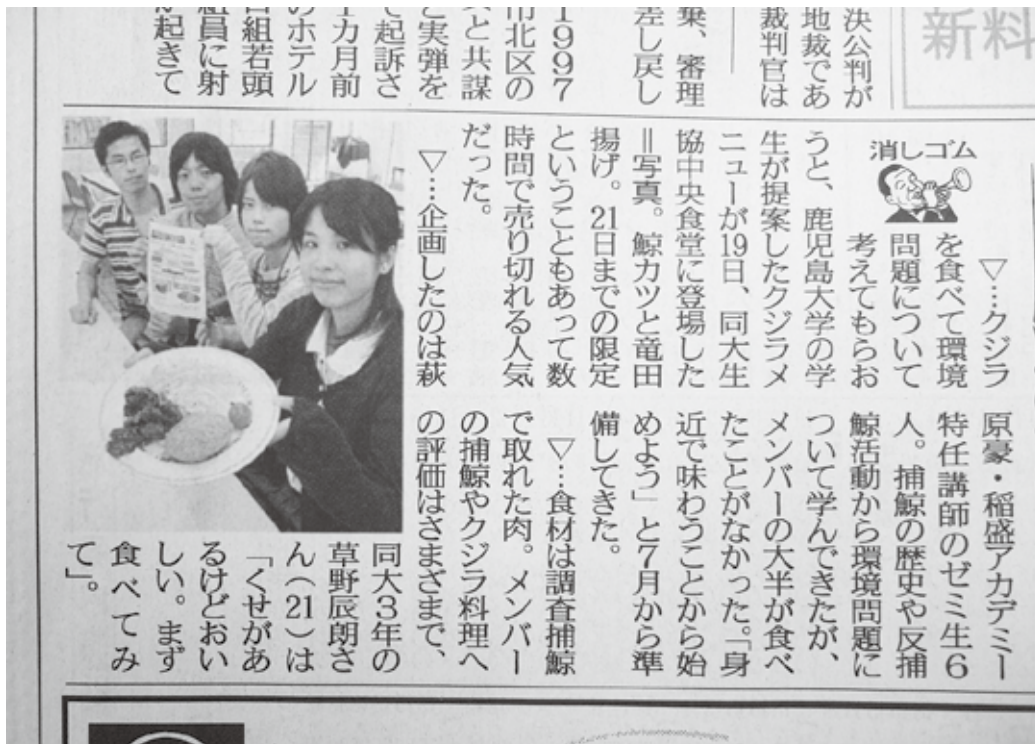


図8 南日本新聞、2009年10月20日、朝刊、23面。



図9 「くじらプロジェクト」期間中に学内に掲示されたポスター
下部に「くじらプロジェクト」に対する匿名の反対ポスターが貼られていた
(2009年10月20日、筆者撮影)

思表示があったことも事実である (図9)

6. 課題と展望

以上、2009年度から2012年度まで開講している「環境教育・ESD論」について振り返り、受講生がどのように稲盛環境思想(共生・知足・利他)を理解し、環境教育活動に昇華させていったのかについて検討を行った。

前章で取り上げた「くじらプロジェクト」は2010年度以降、4時限目では扱わず、5時限目で扱っており、鹿児島大学生協同組合および中央食堂の協力を仰ぎ、現在まで継続的に実施している。どのように活動を展開していくかについては、5時限目の受講生の自主性に任せており、毎年異なった展開を見せている。

2011年度については、並行して「かごしま茶×マイボトル」プロジェクトを行っており、中央食堂での鯨肉メニュー提供期間には、「かごしま茶×マイボトル」プロジェクトを同

時に実施した（図10）。この「かごしま茶×マイボトル」を含めた5時限目の活動については、別稿に譲りたい。

4時限目について、筆者の希望としては前後期通年で受講してもらうことを考えていたが、実際には前期受講生が後期を継続して履修した例は非常に少なかった。これは、座学に慣れてしまっている学生がグループワークを主体としたプロジェクトを進めることに対して苦手意識を持っていたことが大きな原因であると考えられる。実際に意欲のある学生は前後期ともに履修をしており、その後も筆者が担当する講義を継続的に履修している。

また学生の中には継続履修の意欲はあるが物理的に履修ができなかったという例もあった。これは後期の4時限目に必修科目の履修が設定されており、そちらを優先的に履修登録しなければならなかったためである。このような学生は履修登録とは別に、例えば「くじらプロジェクト」など、4時限目や5時限目の学生が進めているプロジェクトに自主的に参画している例もある。

2010年度からは特に5時限目の授業において、「鹿児島を知る」という点と、地域連携（動物園・水族館・環境NGOなど）という点からの活動に重点を置いている。そのひとつが「くじらプロジェクト」の中で言及した「かごしま茶×マイボトル」プロジェクトである。この「かごしま茶×マイボトル」プロジェクトは、4時限目の受講生が提案したプロジェクトを組み合わせたものである。5時限目の受講生が中心となって、これを継続して行っているが、これについては別の機会に報告を行いたい。

稲盛環境思想の「共生」「利他」「知足」という3つのキーワードについて、プロジェクトを通じて体験的に学んでいった学生が多いことは事実である。そのため、意欲のある学生が活動を継続していくための受け皿をつくるのが、今後の大きな課題のひとつであると言えよう。

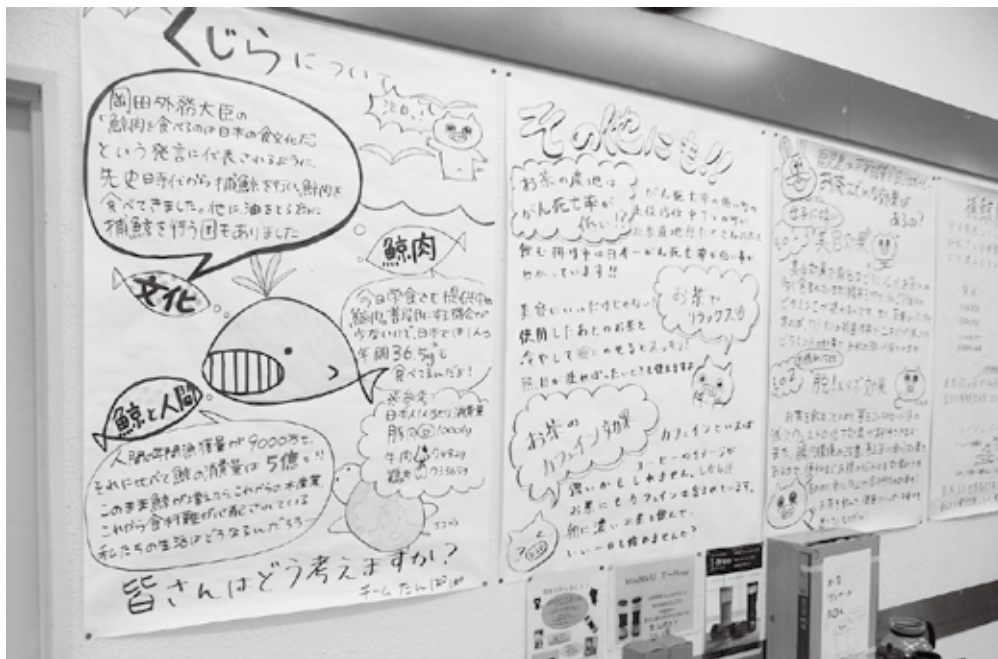


図10 2011年度の「くじらプロジェクト」掲示ポスター
右隣は同時に実施した「かごしま茶×マイボトル」のポスター
(2012年1月20日、筆者撮影)

《謝辞》

「環境教育・ESD論」の講義を展開するにあたり、特に学外における研修については、鹿児島県内の多くの方々の協力をいただいた。2009年度から行っている合宿では、濱田酒造株式会社の河本徳之氏、竹迫昭人氏（傳藏院蔵）、平石智也氏（薩摩金山蔵）、上靄崇氏（傳兵衛蔵）、日本地下石油備蓄株式会社串木野国家石油備蓄基地ちかび展示館、そして九州電力株式会社鹿児島支社の福島賢一氏・川内原子力発電所展示館の方々には、多大なご支援とご協力をいただいた。くじらプロジェクトについては、共同船舶株式会社の大川敏弘氏、長澤久美子氏からご協力をいただいた。かごしま茶に関する活動については、JAかごしま茶業、榎畑政茂氏（株式会社特香園）、木下朋美氏（鹿児島県立短期大学生生活科学科助教）と鹿児島県立大学お茶育研究会の方々に多大なご助力をいただいた。本学関係者では、鮫島吉廣・本学農学部焼酎発酵学教育研究センター教授、不破茂・本学水産学部漁業工学分野教授、野村卓・本学産学官連携推進機構特任准教授（現、北海道教育大学教育学部釧路校准教授）、元木理寿・本学産学官連携推進機構特任講師（現、常磐大学コミュニティ振興学部助教）、酒井佑輔・本学生涯学習教育研究センター講師、NPO法人かごしまルネッサンスの方々、そして鹿児島大学生生活協同組合から多大なご支援をいただいた。その他にも多くの方々のご協力・ご支援を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

《参考文献》

萩原豪「鹿児島大学・共通教育科目における稲盛アカデミー提供科目を通じた稲盛環境思想の実践と課題（1）」『鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要』3号、2012年、pp.1-9。